

カンチルととら インドネシア

あるとき、とらが、カンチルをやつつけようと思つて、森の中をさがしまわつていました。すると、カンチルが、一本のルスーの木の下に立つていました。ルスーの木の実は卵にそつくりです。実は枝も折れそなほどたくさん実つっていました。

とらは、カンチルのそばまで来ていました。

「おまえはこのあいだ、ワニを野豚だといつて、おれをだましたな。もう少しでやられるところだつたぞ。おまえを食つてやる」

カンチルは、

「ああ、とらさん。どうか命だけは助けてください。わたしはいま、王さまの命令で、卵のなる木の番をしているところなんです」といいました。とらは、

「なんだつて。王さまの卵だつて。おれにも少し食わせろ」といいました。

「かんべんしてくださいよ。あなたに卵をあげてしまつたら、わたしは死刑になつてしまひます」

「いいや。卵をくれないとおまえを食つてやる」

「じやあ、少しだけですよ。でもその前に、わたしを逃がしてください。でないと、王さまにつかまつてしまふ」と、カンチルはいいました。そして、いちもくさんに逃げていつてしまひました。

とらは、ルスーの実をひと口食べてみました。ところが、あまりにもすっぱくて、はきだしてしまいました。

「あいつめ。卵なんかじやなくて、すっぱい木の実じやないか」

とらは怒つて、カンチルの後を追いかけました。

とらが走つていくと、カンチルが、大きな木の下に隠れていきました。

「おい、もうおしまいだぞ。おまえは、ワニを野豚だといつてだまし、すっぱい木の実を王さまの卵だといつてだましたな」と、とらはどなりました。カンチルは、

「ああ、とらさん。どうか命だけは助けてください。わたしはいま、王さまの命令で、大事などらの番をしているところなんです」といいました。とらは、

「なんだつて。王さまのどらだつて。おれにも少したたかせろ」といいました。

「かんべんしてくださいよ。そんなことをしたら、わたしは死刑になつてしまします」

「いいや。たたかせてくれないとおまえを食つてやる」

「じやあ、少しだけですよ。でもその前に、わたしを逃がしてください。でないと、王さまにつかまつてしまう」と、カンチルはいました。そして、いちもくさんに逃げていつて、遠くまで來たときいました。

「とらさん、もういいよ。たたいて『らん』

とらは、木にかけてあつた王さまのどらを思い切りたたきました。ところが、それは、どちらではなくて、クマバチの巣だったのです。たくさんのクマバチがいちどに飛び立つて、

四方八方からとらにおそいかかりました。とらは、クマバチにさされてあまりの痛さにうなりながら走つて逃げていきました。

しばらく走つていくと、カンチルが、大木のように大きなヘビがとぐろを巻いて眠つている側にすわつてているのを見つけました。とらは、どなりました。

「こんどこそ、命はないぞ。おまえは、ワニを野豚だといってだまし、すっぱい木の実を王さまの卵だといってだまし、クマバチの巣を王さまのどちらだといってだましたな」カンチルは、

「ああ、とらさん。どうか命だけは助けてください。わたしはいま、王さまの命令で、王さまの大事なベルトの番をしているところなんです」といいました。とらは、

「なんだつて。王さまのベルトだつて。おれにも少しまかせてみる」といいました。「かんべんしてくださいよ。そんなことをしたら、わたしは死刑になつてしまます」

「いいや。そのベルトをまかせてくれないとおまえを食つてやる」

「じやあ、少しだけですよ。でもその前に、わたしを逃がしてください。でないと、王さまにつかまつてしまう」と、カンチルはいいました。そして、いちもくさんに逃げていつて、遠くまで來たときいました。

「おうい、とらさん、もういいよ。ベルトをしめて、とらん」

とらは、とぐろを巻いていたヘビをつかんで、自分のお腹にまきました。身を覚ましたヘビは、びっくりして、とらのからだをぐるぐる巻きにまいてしめつけました。とうとうとらは死んでしまいましたとさ。

おしまい

村上郁再話

資料『インドネシアの民話』ヤン・ドゥ・フリース編／斎藤正雄訳／法政大学出版局